

日本の看護：現在と将来

山本則子

7/28/2014 東京医学教育セミナー

看護師の仕事

- 医師と看護師：どちらも人の**健康な生活を守る**のが仕事。
- **健康を阻むものを見つけて治す**のが医師の本来業務。
 - 診断(病気を見つけて)・治療(なおす)でアプローチ。
- **健康を阻むものがあったとしても生活できるようにする**のが看護師の本来業務。
 - 生活を構成する基本的な要素(食べて、起きて、活動して、排泄して、眠る・・・)にアプローチ。
- 境界線は。。。 **時代と社会**により可変性。

医学【診断治療】

看護【生活の実現】

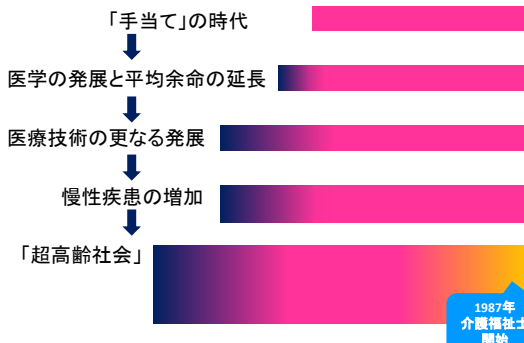
医療と看護の時代的変遷

- 医療の発展以前の人間生活 → **病気はなくせない・治らない**
「**手当て**」(看護)のみ
- 医学の発展と平均余命の延長
 - 公衆衛生の普及、感染症の制圧、内科的治療の発展
 - 外科的治療の発展 → **平均余命の延長**
「**回復過程**」への支援
- 少子高齢化・慢性疾患の増加・医療技術の更なる発展
 - 加齢・病気・障がいを抱えつつ長く生きる時代
→ **病気はなくせない・治らない**
「**生活の実現**」への支援
- 「生活の実現」の看護への回帰：
人類の健康課題への **alternative approach** としての位置づけ

医療のパラダイムシフト

- 急性期だけの医療から、慢性期・在宅を含む医療へ
- 看護実践のパラダイムシフト
 - 「回復過程を支援する看護」だけではなく
 - 「生活支援の看護」へ
- (医学もパラダイムシフト)
 - 「治療の医学」から
 - 「生活支援の医学」へ
- 医療現場における役割分担の再編

医療職者間の役割分担の再編



「生活支援の看護」の自立
への期待

これはいかなる看護か

- 「回復過程の看護」ではない「生活支援の看護」

当たり前はどこでも受けられるようにしたいが・・・。

- 想定を超えた患者のニーズに気づき、自らの役割ととらえ、
応えようとする意思
- 自律的なフィジカルアセスメントの力
- 医師・家族とのコミュニケーション・・・
- 「生活支援の看護」が衰退している状況証拠
 - 「ホスピス」の特別視
 - 長期療養で働くことは「都落ち」
 - 長期療養の看護師が苦しむ「長期療養の看護にはゴールがない」
 - 訪問看護師に必要な「アンラーニング」!?

看護師に求められる能力： 見直しと発展

- 「生活支援の看護」パラダイムへの回帰：生活のデザインを自らの役割と再規定する
 - 患者の体調を自律的に判断し、問題解決の方向性を決定する
 - 自分にできることとできないことを正確に見極める
 - 自分にできないことを他職種との協働で実現する
 - 多職種とつながりシステムを機能させる
 - 医療システムの変化にみあう力
 - 変化についていく力・住民のニーズを敏感に把握し、システムの変化を起こす力
- ↓
- 今後の看護教育への期待

看護教育への期待

看護教育に求められるもの

- 看護理論への回帰と再構築：生活支援の看護論
- フィジカルアセスメントの強化と看護過程への組み込み
- 多職種連携教育
- リーダーシップ教育
- 急性度別の看護学教育
 - 回復過程への支援
 - 生活支援パラダイム……「療養」の看護
 - 一般急性期病院以外の現場での看護実習

教育内容：強化の期待

- 「生活支援の看護」のパラダイムの徹底・定着
 - 急性期病院中心の看護学実習の見直し
 - 在宅看護・外来看護の座学・実習の充実
 - 長期療養の看護学実習の導入
- フィジカルアセスメント力の徹底・定着
 - Objective Structured Clinical Examination (OSCE)の活用
 - Problem Based Learning (PBL)の活用：介入戦略の習得
- 他職種との連携・チームワーク
 - Inter Professional Educationの普及
- リーダーシップの涵養
 - リーダーシップ教育の開発
 - 高校からのリクルート

研究への期待

- 生活支援の看護実践を可能に
 - 「従来の科学」の限界
 - 新たな研究方法の模索

看護学研究への期待

看護学をいかにして創るか

- 看護学 = 154万人の看護師が看護するための「知」
- 看護: 健康を阻むものがあっても、平穩に楽しく生活できるようにする
- 毎日が何のこともなく心地よく生きられるようにする:
 - お風呂に入って気持ちいい、ご飯がおいしい。ビールが喉ごしに心地よい。おしっこが出る。ぐっすりと安眠する。思うところに移動できる。ひとと会話を……。……
- 「わしは幸せだった」と言ってもらえるようにする:
 - 人間の自己実現・Spiritualityは「毎日が何のこともなく心地よく生きられること」から始まる。
- 「自分の身体について思い慮うことから患者を解放するために看護婦が存在すべきだと言いたい」
(ナイチンゲール、高橋龍太郎)

看護学とはどのような学問か

- 154万人の日々の看護実践のための「知」を創る
- 看護実践の構造をふまえずには。
 - 1) 患者・看護師の多様な文脈の詳細が強く影響
 - 2) 一つの看護行為は多様な目的を持つ
 - 3) 一つの目的のために多様な支援を積み重ねる
 - 4) 求める患者アウトカムは多側面が統合された「わしは幸せだった」

一つの看護行為は多様な目的を…… 看護師が「お風呂に入りましょう」と言うときの 意図(アウトカム)

- 身体の清潔の確保 褥瘡の予防
- 心地よさ 疲労回復 リラックス
- 手術後の傷を自然に見て受け入れる準備
- リハビリテーションの一環として
- 看護師との関係づくり 患者さんと家族との関係づくり
- 半年後ぐらいに必要なようなサービスを受け入れやすくするために
- 最期の思い出を残して遺族の病的悲嘆を予防するために

看護師が入浴を支援したことの効果を証明？

一つの目的のために多様な看護支援を積み重ねる: 胃瘻造設の代理意思決定支援

1. 患者の状態を安定させ、家族に考える余裕を与える
 - a. 負担の大きい介護は代行する(排便ケアなど)
2. 情報過多状態の混乱を軽減する
 - a. 最低限の情報提供・補正
 - b. 家族の理解を言語化させて情報整理を手伝う
 - c. 看護師の意見は言わない
3. 意思決定の重責を緩和する
 - a. いかなる意思決定でも支えることを伝える
 - b. 時間がかかっても良いから自分たちで決めるように
 - c. 本人の意向が探れないか試みる
4. 意思決定を後悔させないために最善の食事ケア
 - a. 患者が笑顔で食べられるよう食事の援助:「うちは胃ろうにして良かった」と思ってもらう

看護学の知とはどのようなものか

- 看護という具体的で実行可能な行為へと導く知は、…
＜何のために(意図)＞という実践の目的…をそのうちに含んでおり、さらに人間が人間に働きかける点において、相手を部分として活きた関連から切り離されたく対象として、ただ外から眺めるという方法は成立しない。
(池川清子)
- 介護の本質は介護力ではなく、介護関係なのである。どう老いや痴呆に関わるのか、どんな相互関係を作ればいいのか、という方法論を創造することをしないで介護者の数を二倍にしたらどうなるだろうか。私は、ゆとりをもって手足を縛って歩くだらうと思う。
(三好春樹)

看護学の構造試案

- 看護の人間理解：
 - holistic, inter-subjective, contextual
- 生活支援の看護：
 - 支援内容: 従来の意味での「科学」
 - 支援戦略: ネットワーク状の支援を把握できる「知」とは？
 - 優れた現象からの概念化・理論化
 - 従来の意味での「科学」の無力

代理意思決定支援における 家族の苦悩を支える

1. 負担軽減により意思決定する余裕を持たせる
 - ↓ a. 負担の大きい介護を代行する(排便ケアなど)
2. 情報過多状態の混乱を軽減する
 - ↓ a. 最低限の情報提供・補正
 - ↓ b. よく聞いて情報整理を手伝う
 - c. 看護師の意見は言わない
3. 意思決定の重責を緩和する
 - ↓ a. いかなる意思決定でも支えることを伝える
 - ↓ b. 時間がかかっても良いことを伝える
 - c. 本人の意向が探れないか試みる
4. 意思決定を後悔させないために患者に最善のケア
 - a. 患者が笑顔で食べられるよう摂食の援助: 「うちは胃ろうにして良かった」と思ってもらう

代理意思決定支援の理論

中山・岩本 患者中心の意思決定支援 (2012)

1. 胃ろうを造設することの利点・欠点を考慮する
2. 本人が望むことを把握する
3. 判断が代理意思決定者に与える影響を整理する
4. 疑問点を明確化する
5. 誰が最終判断をすべきかを明確にする
6. 胃ろうを造るか否かを決定する



訪問看護師の語った内容とのちがい……

- 身体的ケア(排便・食事のケア)が意思決定支援に不可欠であったことを明示: 意思決定支援の文脈の中での日常生活援助の位置づけ
- 主役が対象者(患者・家族)であることの明示
- 原理原則に表れない・原理原則が当てはまらない状況の説明

看護学研究への期待

- 看護実践の人間観を尊重
- 既存の方法論にとらわれず、研究方法論からの見直し
- 多様な方法論に開かれた目を持つ
- 看護実践のための研究であることを大切に

日本の看護: 現在と将来

- 日本社会・医療システムの変化と共に大きく変わる看護への期待
- 「回復過程への看護」から「生活支援の看護」へ
- 変化に応える看護であるために
 - 看護教育への期待
 - 「生活支援の看護」を実現する教育へ
 - 看護学研究への期待
 - 現場から作り上げる「支援戦略の知」の方法論の開拓を
 - 看護職集団への期待
 - コンセンサスを作り、一枚岩になって社会の期待に応える看護に
 - 和魂洋才: 良いものは取り入れ、自分の良いところにプライドを

謝辞

- 高井ゆかり、五十嵐歩、鈴木美穂、山花令子
(東京大学大学院)
- 輪湖史子 (日本看護協会)
- 石垣和子 (石川県立看護大学)
- 辻村真由子 (千葉大学)
- 安塚則子、森元陽子
(みんなの訪問看護リハビリステーション)